立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１４年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学　研究科　日本文学　専攻		
研究代表者（2015年3月現在のものを記入）	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程前期課程２年	渡部　裕太　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	文学部・教授	石川　巧　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　人文　・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名
研究課題	梅崎春生の占領期に於ける作品と第一次戦後派の同時代評価		
研究組織（2015年3月現在のものを記入）	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程前期課程２年	渡部　裕太	
研究期間	２０１４　年度		
研究経費	（支出金額）　90,463　円／（採択金額）　200,000 円		

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、占領期の梅崎春生の小説や随筆といった著作物をプランゲ文庫などから収集し、昭和二〇年代の梅崎春生作品の再検討を試みるものである。

戦後まもなく登場した第一次戦後派作家らのなかで他の作家では無く梅崎春生を研究の中心的位置におくのは、梅崎がマルクス主義思想を作品に現さないまま、第一次戦後派として活躍しはじめたからだ。第一次戦後派作家について本多秋五は「マルクス主義--戦前の日本で唯一の社会科学であり、合理主義的思想であり、宗教でさえもあったもの--の洗礼をうけた前歴をもつ」ことを共通点として挙げる。こうした文学者の認識の中で、梅崎が、なぜ第一次戦後派を代表する作家のひとりとして受け止められていたのか、という問題を資料から考察することは、文壇登場の年代で大きく括られた文学史上での「戦後派」の全体像と枠組みを見直すための、重要な基盤となりうる。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　第一次戦後派　〕〔　梅崎春生　〕〔　占領期　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

初刊本、プランゲ文庫資料などを利用し、一九四五年から一九四九年にかけての文芸誌、大衆紙、新聞、他に掲載された、第一次戦後派作家、特に梅崎春生の言説を調査した。それによって、これまで文学研究上で取り上げられてこなかった作品や書評などを、作家評価の上での参考資料の位置に押し上げることが出来るのではないか、と考えた。

第一次戦後派作家のひとり梅崎春生は、一九四六年九月に「桜島」を『素直』に発表し、同年一二月に専業の作家としての生活を始める。以降、短編小説を立て続けに執筆し、処女長編「限りなき舞踏」連載終了までに、創作集『桜島』（大地書房　一九四七年一二月）、『日の果て』（思索社　一九四八年二月）、『飢えの季節』（講談社　一九四八年八月）、『B島風物誌』（河出書房　一九四八年一二月）、『ルネタの市民兵』（月曜書房　一九四九年一〇月）を出版する。戦後派作家として順調なペースで作品発表を続けていた梅崎だが、単行本『限りなき舞踏』（小山書店　一九五〇年五月）、短編集『黒い花』（月曜書房　一九五〇年一一月）刊行の後、長編作品「日時計」（のち「殺生石」に改題、『群像』一九五〇年四月、七月、九月、一二月）を中絶するなど、創作に苦心するようになり、一九五三年一月の『梅崎春生集』（『新文学全集』河出書房）まで新刊が発表されていない。

梅崎本人はこの時期について、「行き詰ったといってもよろしい」と自身のスランプを告白している（「私の創作体験」『岩波講座　文学の創造と観賞』一九五五年二月）。このスランプについては戸塚麻子氏の研究（『戦後派作家　梅崎春生』論創社　二〇〇九年七月）が委しいが、そのきっかけについてはこれまで研究が為されてこなかった。

そこで、資料を収集し梅崎本人の言及を確認したところ、「偽卵」（『知識人』一九四九年一月）「囚日」（『風雪』別冊　一九四九年四月）「黄色い日日」（『新潮』別冊　一九四九年五月）の発表年順で先行論で扱われてきた三作が、実際には「囚日」「偽卵」「黄色い日日」の順で執筆されていたことがわかった。また梅崎が「「囚日」といふ作品は、私の身近に起つた事象に取材して書いた。もつと長く、百枚程度に始めは書くつもりであつた。しかし書いてゐるうちに、書いてゐる自分に嘘を感じ始めてきたので、どうしてもあそこまでしか書けなかつた。材料が重かつたのではなく、自分が信じられなかつたからである」として断筆し、そのまま発表していたことが明らかになった。この資料によって、梅崎のスランプのきっかけが「囚日」という作品にあると推定でき、これまでの梅崎研究ではほぼ取り上げられることのなかった作品を再検討することが出来た。

また、「限りなき舞踏」という新聞小説が、梅崎のスランプの転換点となっていることを確認した。これは、一九四九年九月から一二月まで、西日本新聞と北海道新聞に連載された、梅崎春生のはじめての長編小説であるが、「中間小説」的作品だとされ、研究史上では等閑視されていた。

新聞連載の予告で、「私の貧しい夢をはらんだお伽話」だとされたこの作品は、単行本化された際のあとがきで「形式の制約、たとへば一回何枚といふ区切り、全篇の長さの指定、題材や登場人物などについての幾分の制約、そんなものが私の筆を渋滞させたり、また屈折をさせたりした。さういふ点からの失敗は、今読み返してみても、どうも否定できないやうな気がする」と、作者自身によって「失敗」だと評されている。「囚日」の失敗の原因は「嘘」の意識とされていたが、それは「限りなき舞踏」においては「形式」の制約として表面化している。「嘘」の意識が解決されたのではなく、それよりもより重要な問題として「形式」の問題が表出したのである。

「限りなき舞踏」を取り上げることによって、「私の創作体験」で梅崎が語ったスランプが、詳細に見ると「うそを書いている、デッチ上げをやっている、その意識」という「嘘」の意識に端を発し、その上で、新聞小説という制約付きの長編小説への苦悩によって「自分流に設定した「小説」というものの枠や形式に、しばられていた」と「形式」の問題へと移行していくかたちで長期化したことがわかった。

これらの事柄を先行研究と接続させるために、梅崎本人がスランプの解消につながったと言明している「山名の場合」を検討した。

「山名の場合」は雑誌『新潮』に一九五一年一一月に発表され、翌年四月の『創作代表選集』（日本文芸協会編　大日本雄弁会講談社）に収録された。この作品について、伊藤

研究成果の概要　つづき

整は「ユーモラスな批判を含む日常生活描写としての佳作」と評し（「活躍した人々と作品」『創作代表論集』日本文芸家協会編　大日本講談社　一九五二年四月）、浅見淵は「諷刺味の勝った「大人のメールヘン」的作品」と説明する（『新選現代日本文学全集』筑摩書房　一九五九年一〇月）。いずれも、この作品から「諷刺」的なユーモアを読み取っているものである。また、平野謙は「庶民生活の愚かな風景こそ人間の普遍的なありかたではないか、とする虚無的な人間意識」が根柢にあり、その庶民生活の愚かさに梅崎が「同類意識」を抱いている、と指摘している（「解説」梅崎春生『ボロ家の春秋』角川文庫　一九五七年二月）。

そのような評価をふまえ、高橋啓太は「山名の場合」を「ボロ家の春秋」や「Ｓの背中」「鏡」などとともに「市井小説」と位置づける。それらの作品が「「軽いニヒリズム」を描いているとみなされている」ことを指摘し、「「コミカル」「ユーモラス」といった言葉も「ニヒリズム」と無縁な立場からの評価ではない」とする。その上で「山名の場合」は「自己投影できない〈隣人〉との接触を露わにしているテクストなのだ」と定義づけ、「主体確立の挫折」という「ニヒリズム」的な作品解釈の読み替えをはかっている（「梅崎春生の市井小説とその可能性」『日本近代文学会北海道支部会報』二〇〇二年五月）。戸塚麻子は、「山名の場合」を「従来の梅崎の文学には決してなかった明るく健康的なストーリー」だとする。戸塚によれば、「ユーモア」とは「過酷な現実を切り抜けようとするとき現れる精神態度、現世から自己を切り離し、或いはずらすことによって、自己を相対化し、解放しようとする態度のこと」であり、「ニヒリズム脱出の為に編み出された方法」である。梅崎が「ユーモア」によって「〈憎悪〉による他者との関係の回復という架空の観念を創り出した」のが「山名の場合」だとし、この「フィクション」によって梅崎は創作上の「行き詰り」を乗り越えたと説明している（「ニヒリズム超克の試みとその挫折（一）--梅崎春生の一九五〇年前後の私小説的作品群、及び可能性としての『山名の場合』--」『日本文学誌要』二〇〇〇年三月、及び「ニヒリズム超克の試みとその挫折（二）--梅崎春生に於ける〈フィクション〉の破綻と政治への視線--」『日本文学誌要』二〇〇一年三月）。

このように「ニヒリズム」を鍵として読み解かれてきた「山名の場合」がスランプ解消に繋がった理由を考察するため、作品の構成を追い、作中小説「五味の場合」との比較をおこないながら、作者／語り手／主人公の関係性を考察した。主人公山名の、ひとを「莫迦」にしようとする性格設定は、「囚日」の主人公である「私」と類似しており、最後に自己変革を志して物語が終わる作品構成は、「偽卵」と一致している。「山名の場合」において山名と「同類」として設定された語り手は、「囚日」の「私」的な存在であり、自己変革を志した山名に置き去りにされるかのように物語を閉じる。より正確に言えば、「囚日」の逃げ出す「私」と同じ要素を、「山名の場合」の語り手は付与されているのである。そうした語り手を設定し、「私」と自身とのあいだに置くことが、梅崎春生の得た「形式」である。語り手を設定し、過去の自身のようにデータを集めて書く山名を批判させる、というこの構成は、作者自身が語り手「私」のように突き放される、という可能性を無くし「架空」の小説を書けるようになるという、梅崎春生のスランプに対する救いとして成立しているのである。

つまり「山名の場合」は、スランプの原因となった「囚日」や「偽卵」の要素を盛り込み、そこに内包されていた「嘘」の意識を、鳥瞰的な視点から物語る語り手「私」に押しつけることによって解消する、という「形式」をもつ作品である。椎名麟三によって「宮沢賢治」の語り口を採用した、と証言されているこの作品は、作者と切り離された語り手を得た梅崎が、それによって「嘘」と「形式」の問題を一挙に解決する契機となったのである。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
・渡部裕太、「「同類」を「憫笑」するために　―梅崎春生「山名の場合」における「ユーモア」と「ニヒリズム」」、立教大学日本文学、第一一三号、二〇一五年一月、六四頁

②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
なし

③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
なし

④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）
なし